

万国博覧会（万博）

1851年、ロンドンで世界初の万国博覧会が開催されました。ガラス製の巨大パビリオン「クリスタル・パレス」を会場にしたこの博覧会は、144日間に600万人以上が来場するという盛況ぶりでした。このロンドン万博の大成功をきっかけに、「欧米列強」の各国は競って万国博覧会を開催するようになります。

特にフランスは万博開催に熱心で、1855年から1900年の45年間に計5回のパリ万博を開催しました。なかでも、フランス革命100年を記念して1889年に行われた第4回万博では、現代にもその姿を残すエッフェル塔が建設され、開催前の激しい論争に反して大人気となりました。

これらの万博は、産業革命を経て社会変革の時代を迎えていた欧米諸国にとっては、大衆に向けた産業技術の見本市であり、産業化された消費社会の夢を与える場でもありました。人々は広大な会場に陳列された国内外の最新の技術に熱狂し、技術発展がもたらす豊かな未来の可能性に魅了されました。

同時に、1928年制定された国際博覧会条約には展示の内容として「植民地の開発」があげられていたことからわかるように、万博は当時の植民地主義と帝国主義、人種差別的な思想を強く内包したイベントでもありました。会場内には、各国の植民地住民が起居し暮らしぶりを見せるパビリオンが作られ、多くの来訪者が「展示」を楽しみました。平野暁臣著『図説万博の歴史：1851-1970』によれば、1867年のパリ万博には日本の柳橋芸者3人が「展示」されました。また、日本は1904年のセントルイス万博にはアイヌ民族の人々を派遣しました。

第二次世界大戦後にはこのような「植民地展示」は徐々に姿を消し、1972年、国際博覧会条約が改正されると条約の文面からも「植民地」の文字は削除されました。

戦後の万博では、展示技術の発展にともない、パビリオンは技術・製品の陳列や実演から、未来に向けた社会発展の理念・ヴィジョンを体験させるものへと変貌します。1964年、65年の2年にわたって開催されたニューヨーク万博には、GM社、フォード社をはじめ合衆国有数の大企業が莫大な経費を投じたアトラクションを作り、5,000万人を超える来場者を記録しました。そして、続く1970年の大阪万博は、さらにそれを進化させ、さまざまなかたちで希望ある「未来」を体験させるものでした。展示された月の石やロケット、会場内を走るモノレールや電気自動車などがもたらす、SF的近未来到来の予感に人々は熱狂しました。

大阪万博の来場者は6,400万人を超え、高度経済成長のただ中にあった日本が開催した万博は、前代未聞の大好評を博したのでした。

【参考文献】

『万博学：Expo-logy, 創刊号』万博学研究会編 思文閣出版 資料ID: 111374751

『図説万博の歴史：1851-1970』平野暁臣著 小学館クリエイティブ 資料ID: 111316848